

出張報告書

平成21年10月
小松久恵

1. はじめに

「国家の輪郭と越境」を検討する上で、報告者は「インド」という国家の輪郭がどのように成立し、またそれがどのように変容していくのか、「インド」表象に着目し考察することを試みている。今回の出張では独立前のインド、特に独立運動興隆期である1920年代に注目し、当時の言説を書き手の立ち場から二つに大別して 1. 輪郭の外側からの描写——インド滞在西洋人によるインド描写 2. 1.への内側からの反応 を明らかにすべく、インドならびに英国での資料調査を行った。1に関しては、当時インドで布教活動を行っていたミッション団体の活動報告書、女性宣教師たちの自伝や書簡に注目。また2に関しては、4月からの研究会で分析考察を重ねてきた『Mother India』に対するインド人からの反論を広く収集することを目指した。

2. 日程 (8月20日～9月25日)

8月20日

午前 関西空港発

夜 インディラ・ガンディー国際空港着 (経由国タイ・バンコク)

8月21日

国立ネルー記念博物館／図書館 (Nehru Memorial Museum & Library 以後 NMML) 訪問

マイクロフィルムの利用予約および開架の書籍・雑誌調査

8月22日

都市部の本屋 (Full Circle/Bahrison @ Khan Market) 見学

8月23日

市内視察、国立文学アカデミー前会長表敬訪問

8月24日

デリー大学訪問

8月25日

オールドデリー市の出版社 (Shakun Prakashan, DK Publishers) にて資料収集

8月26日～8月27日

午前 NMML にてマイクロフィルム閲覧

午後 NMML 開架にて関連書籍調査、並びにコピー依頼

8月28日

午前 日本国大使館へ証明書依頼、NMML プライベートセクション利用申請

深夜 インディラ・ガンディー国際空港発

8月29日

イギリス到着

9月1日～5日

大英図書館にて資料閲覧

9月7日

ロンドン大学アジア・アフリカ研究科 (School of Oriental and African Studies) 付属図書館にて資料閲覧

9月8日～18日

大英図書館にて資料閲覧

9月19日

イギリス出発

9月20日

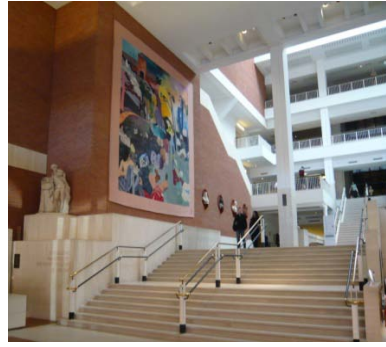
インド到着
9月21日
ニューデリー市本屋（Oxford Books Store）にて資料収集
9月22日—24日
NMML プライベートセクションにて資料収集
9月24日
デリー出発
9月25日
帰国

3. 日程における特記事項

- (1) 1920年代にヒンディー雑誌上で活躍した文学者に関する資料を収集するため、オールドデリー市のヒンディー文献を中心に扱う出版社を訪問。インドにおいて、特に英語以外の文献で小さな出版社から出版されているものは、直接その出版社を訪ねない限り、本屋では入手がほぼ不可能である。大手出版社以外は小さな一部屋に机が1、2台並ぶだけの簡素な社屋であり、個人経営のようなものである。入り組んだ小道をたどり複雑な番地を探し当てるのは非常に困難であった。目当ての出版社のうち一社は住所が変更されたのか、どうしても発見することができなかった。最も必要としていた文献 *Divangat Hindi-Seva*(1981)は、ヒンディー文学の発展に貢献した文学者たちを広く紹介した上下巻の事典で、出版されたのは20年以上前になる。そのため取り寄せ、あるいは絶版を覚悟していたのだが、メモを一瞥するなり老店主（社長というべきか）があっさりと片隅の棚からそれを取り出したのには驚いた。「大学の図書館以外誰も買わない」とのことで、どうやら20年前から売れ残っているらしい。数日前に訪問した市内の本屋——流暢に英語を話す店員、英語中心の多種多様な書籍、外国人を含む多くの顧客——とひどく対照的で、現地語出版の行く末を考えずにはいられなかった。メトロならびに陸橋の工事、加えて集中豪雨のせいで、相変わらずデリーの交通渋滞はひどい。どこにももまるで到着時間が予想できないのには困った。グルガオン市の古書店に問い合わせたところ、一日かけて訪問するほどの資料がなさそうだったため、今回は訪問を見送った。
- (2) マイクロフィルムのコピーを申請した後、NMML内のマニュスクリプトセクションへ移動。当セクションには、インド近代史上重要な人物や団体による、未出版の書簡や日記、あるいは会報などが収められている。プライベートペーパーのリストを参照し、1920年代に北インドを拠点として活躍した女性たちの書簡等、現物をオーダーしようとしたところ、リストまではNMMLのメンバーシップで閲覧できるが、現物を利用するには別のメンバーシップ登録が必要だと言われる。そのメンバーシップについて、前回の出張時から複数名の図書館員に確認してきたというのに！前回から意思の疎通ができていなかったことに悄然としつつも、あわてて提出書類を確認する。必要書類は大学からの在職証明ならびにパスポートコピー、そして大使館からの人物照会状。すぐに大使館に問い合わせ、必要文書を発行してもらえることが分かったので翌朝大使館を訪問、文書発行を申請し、2時間ほどで入手。その足でマニュスクリプトセクションの利用申請に向かった。イギリスに出発する当日であったため、申請だけ行って利用開始はイギリスからの帰国後になる旨を係員に告げた。
- (3) 大英図書館でのメンバーシップ申請は、認可されないこともあると聞いていたためやや緊張して臨んだ。必要事項をコンピューターに打ち込み、係員から名前が呼ばれるのを待つ。自身の研究について話す若い研究者に、係員がメンバーカードを渡しながら「All the best for your Ph.D.」と声をかけるのを聞いているうちに、研究者が大切にされる環境だと改めて実感された。自分も研究内容を尋ねられ、あんな風に温かく励まされるのかしら、と少々楽しみにしていたところ、教授クラス（だと思われる）の申請者ばかりを担当していた初老の係員に名前を呼ばれ一瞬驚く。提出した書類はざっと目を通されただけで返却され、図書館利用の心得が記されたパンフレットと共に、メンバーカードがあっさり手元に来た。やや拍子抜けである。



大英図書館のモダンな入口



明るいエントランス



館内は吹き抜け

(4) 図書館は9時半開館だが、15分前くらいから入館者の列ができる。毎朝その列に加わって並び、4階にあるアジア・アフリカセクションに一番乗りするのがひそかな楽しみだった。必要資料はすべてコンピューターを通じてオーダーし、画面上には手元に届くまでの大体の時間まで表示される。また資料の利用が終わるまでは、申請するとカウンターのうしろに保管しておいてもらえる。非常に便利なシステムだが、その流れを把握するまでにやや時間がかかった。しかし慣れるに従ってスムーズに利用できるようになった。

前半はキリスト教団体のインドでの活動報告書を中心に調査。中でも Church Missionary Society によるレポート *Report of the Church Missionary Society's delegation to India, 1921-1922* は、代表団が半年かけてインド全土のミッションを訪問し、現地活動の実情把握に努めた興味深い報告書であった。教育に関する章、中でも女子教育に関連する事項——男児教育との差異、教育普及を阻む諸問題、女子の高等教育——等が詳細に記述されており、ミッション団体が現地での教育活動を非常に重視していたことが改めて実感された。また *A Welsh Woman's Work in India, Lilian M. Edwards(1941)* は、これまでの調査でごく断片的にしか入手できなかったミッション女性のインド滞在記、活動報告である。渡印前の訓練、滞在中の具体的な生活形態、現地社会・文化に向ける目など、同書には有益な情報が満載であり、貴重な資料となる。今後さらなる分析考察を行う。

後半ではアメリカ人ジャーナリスト、キャサリン・メイヤーの問題作、*Mother India* (1927) に対する言説の調査を行った。著者メイヤーは執筆目的を「インドの現状を紹介する」としたが、インド文化の後進性を強調し、英国支配の正当性を主張する同書は、出版直後から国内外で大きな論争を引き起こした。今回閲覧したいくつかの資料の中で、以下の2点は特に貴重な文献である；

① *Miss Mayo's MOTHERINDIA ; A Rejoinder* (1927) by K. Natarajan

インド人社会改革者 Natarajan による書は、初版の発売後1年以内に第三版が出版され、その好調な売れ行きは人々の関心の高さを示唆している。同書は第一部が本人の長大な論文、第二部がインドと西洋双方の政治・宗教指導者の意見の引用、という形式で構成されている。第一部では *Mother India* が詳細に分析され、メイヤーの作品は「misrepresentation」の連続である、と反論と批判が繰り返される。続く第二部では、ガンディーやタゴール等、頻繁に引用される人物による批判文のみならず、新聞・雑誌への投書や様々な人物のスピーチ原稿、またインド在住の女医や宣教師団体による反論など、様々な反応が広く紹介されている。*Mother India* に対する当時の世論を把握するにあたって、非常に興味深い貴重な資料である。

② *Mother India ka Javab* (1927)

この書は今回の出張の最大の収穫であるといってもよい。これまでずっとインドで探し続けていたインド人女性による、ヒンディー語での反論本である。多くのメイヤー批判者にとって、最大の論点はインド女性の表象についてであった。しかしその当事者たるインド女性によるメイヤーへの反論は、意外なほど少ない。一冊の本として残されているものとして、同書は唯一の存在だといえる。その構成はオリジナルの文章を各章、各パラグラフ毎に引用し、ところどころでヒンディーに訳しながら批判、否定するという形式がとられている。全体の特徴としては、改行が少なく、感嘆符が多用される文体であり、ところどころで理論の破綻がみられる。また文学者や医学者、そのほか各分野の権威の意見が各所で引用されているが、その出典が明記されていない。著者 Chandravati Lakhanpal の名がヒンディー文学界で広まったのは同書によってであるが、しかし同書が学術的に高い評価を得ていたとは思えない。しかしその荒削りな文体が、より直截的に彼女の憤り、怒りをス

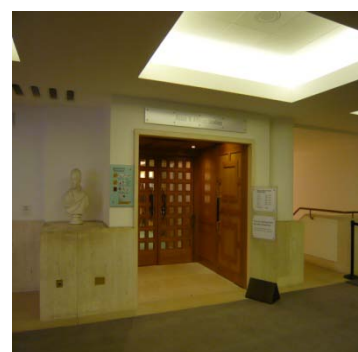
トレートに伝えており、同書はいわば彼女の肉声であり、時代の空気を感じる上で非常に貴重な資料であることは間違いない。



一番乗りの顔触れはいつも大体同じ



自然に整然とした列ができる。
インドでも可能だろうか？



4階アジア・アフリカセクション

- (5) 大英図書館で偶然再会した日本人研究者に、彼が所属するロンドン大学アジア・アフリカ研究科 (School of Oriental and African Studies) の図書館を案内してもらった。ライブラリアンからも報告者が必要としているミッション関連の資料は SOAS のほうがそろっている、と助言されたが、その言葉通り図書館地下のアーカイブには複数のミッション団体の会報が、見事に製本されて並んでいた。抜け落ちている部分もあるが、レポートによっては 18 世紀のものから保管されている。各レポートには、本国における諸会議ならびに活動の報告、各国での活動報告、現地文化風俗紹介、書評などがイラストや写真とともに収められている。特に書評欄は興味深く、20 世紀半ばに出版されたインド文化を紹介する文献を数点知ることができた。今回はごく一部の確認に終わってしまったため、次回に詳細な調査を行いたい。



ロンドン大学アジア・アフリカ研究科建物



正門

- (6) ロンドンからデリーに戻った後、NMML のプライベートセクションでの資料調査を行う。しかしオーダーしてから手元に資料が届くまで、実に 3 時間以上かかった。後で聞くと、インドのお祭り時期に重なっていたため、係員の多くが休暇をとっており少人数で業務を行っていたらしい。しかしこちらには実質 2 日半しか日数が残されていなかったため、非常に焦った。さらに資料によっては手書きのため、読解には時間がかかる。インド女性による *Mother India* 評論を探したが、閲覧できたのは唯一、南インドを中心に活躍した女性活動家、Muttulakshimi Reddi によるスピーチ原稿のみであった。原稿が癖の強い手書きだったため、その読解はまるで暗号読解のようであり、四苦八苦している私を見かねた係員が暗号解析を手伝ってくれたのは非常にありがたかった。加えて、ヒンディー女性雑誌編集の先駆者である Rameshwari Nehru による女性問題に関する記事やスピーチ原稿をいくつか閲覧することができた。

所感

(1) 今回はデリーでの時間が非常に限られていたため、NMML ではまずマイクロフィルムで『Mother India』出版当時の新聞を検索、同書に関する書評や読者投書等のコピーを依頼した。Times of India や Aaj, Pratap 等、当時の大手新聞紙上の同書に関する記事が入手できたが、記事数も少なく、記事自体もさほど大きなものでなかったこと意外であった。先行研究等からの情報をもとに、同書が出版直後から国内外で大きな論争を引き起こしたことを念頭においていたため、新聞各紙で盛んに取り上げられていたに違いない、という先入観が大きすぎたのであろう。あるいは出版直後の 1927 年 11 月から 12 月に設定した検索期間が短すぎたのであろうか。もう少し長いスパン、たとえば一年間くらいの検索が必要だった可能性もある。次回、もう少し時間に余裕のあるときに続けて調査をしたい。

(2) インドで布教活動を行ったミッションを調査する上で、基礎情報が不足していることを今回の出張で痛感した。これまで報告者はインドでのみ調査を行っていたため、ごく限られた資料を認識していただけであった。しかし今回のロンドン出張で、特に SOAS のアーカイブスで以下のような資料を確認した；

- London Missionary Society *'Report of the L.M.S.'*
- The Colonial Missionary Society *'The British Missionary' / 'Colonial Missionary Society Report'*
- American Board of Commissioners for foreign Missions *'Missionary Herald'*
- Wesleyan Methodist Church *'The Foreign Field'*
- Methodist Missionary Society *'Methodist Missionary Society Archives'*
- United Methodist Church, London *'The Missionary Echo of the United Methodist Church'*

これらは月刊誌や隔月誌、会報が数号ずつまとめて製本されたものであり、レポートによっては 18 世紀のものから保存されている。インドに関連する記事を拾い集め、丹念に読み込めば、雑多な情報が広範囲にわたって得られるに違いない。今回は時間の制限もあったため、次回の機会をまちたい。またこれらの資料から複数の団体が北インドに宣教師を派遣していたことが判明、調査対象を再設定する必要性を感じた。「北インドを拠点として活動した宣教師女性の現地報告」という大雑把な設定ではなく、今後は特定のミッション団体に対象を定める。そしてまずはその団体について調査する必要がある。それらの資料の所在が確認できたという点は、非常に大きな収穫であった。